●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成２３年　西雲寺だより　春号（２１号）

前坊守
十三回忌
法要のご案内

平成二十三年
四月二十四日(日)
午前十時より

法話
野世信水師

おときをご用意
いたします

みなさま
お誘い合わせて
お参り下さい

いよいよです！
宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌

一泊コース
五月二十日（金）～二十一日（土）
<本廟参拝～京都観光～ホテル泊
帰敬式～御遠忌参拝～狂言鑑賞～七時頃着>
費用三万円　現在二十三名

土曜　日帰りコース
五月二十一日（土）
<早朝発～御遠忌参拝～狂言鑑賞～七時頃着>
費用一万円　現在六十一名

日曜　日帰りコース
五月二十二日（日）
<早朝発～御遠忌参拝～狂言鑑賞～七時頃着>
費用一万円　現在七名

最終締め切り　五月八日（日）

ぜひご一緒に！

親鸞聖人のご生涯

関東の親鸞

聖人の布教生活

常陸の国（茨城県）の稲田に腰をすえて十数年、土地の人々ともなじみ、本願念仏のみ教えに帰依する人々も次第に増えていったようである。聖人の布教範囲は広く関東一円に及んでいる。人が一時間に歩ける距離は四～五キロだから四十キロなら八時間程度はかかる。つまり朝に稲田の草庵を出ると、夕方ごろ弟子の家につき、夜、教えを説いて翌日帰ってくる。聖人はこんな一泊二日の布教生活を通常送っていたと想像できる。

聖人の教えに帰依した人々は、武士や領主、神官にまで及んでいるが、やはり多数は「いなかの人々」と呼ばれる百姓や商人、猟や漁（すなどり）をして生活をする人々であった。

『歎異抄』に

うみかわにあみをひき、つりをして世をわたるものも、野山にししをかり、とりをとりていのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畑をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなりと、さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし、とこそ聖人はおおせそうらいし

と具体的に述べられている。これらの人々は当時社会から差別され、さげすまれて生きる人々であった。しかし聖人はこれらの人々こそ如来の本願の正機であるとみられたのである。そして自らも妻をもち子供をもつ家庭人として、煩悩に悩み苦しむ愚かな凡夫としてこれらの人々と生活を共にし、本願がかけられている身であること、お念仏申させていただくことの大切さを諄々と説かれたのである。これらの人々はなりわいとはいいながら、猟や漁をして殺生して生きることに、また業縁のもよおすままに愚かなふるまいをもしてしまうことに深い罪悪感を感じていたのではないだろうか。

『歎異抄』のなかに

罪悪深重、煩悩熾盛（しじょう）の衆生をたすけんがための願にてまします

とあるが「いかに罪業は深重なりとも如来の本願はすくいましまします」という如来の大悲に彼らはすくいを見いし、生きるよろこびを回復していったのである。

妻　恵信尼

聖人の二十年間にわたる関東における布教生活は、聖人一人のなせるものではなかった。そこにはよき協力者、妻恵信尼の存在があった。家庭をもち、子供をもつ身として恵信尼もまたいなかの人々と生活を共にし、お念仏の教えを聴聞し、よき相談者として慕われたのである。

恵心尼によって建てられたといわれる五輪の塔

真宗では住職の妻のことを「坊守」と呼ぶが、聖人の布教生活を支え、家庭を切りもりし、お同行と親しく接する恵信尼のすがたは、今日の坊守の手本というべきであろう。室町時代に書かれた「親鸞聖人御因縁」には法然上人が結婚したばかりのころの恵信尼をみて「子細なき（立派な）坊守なり」と語ったというエピソードが残っている。

関東においては三人の子供が誕生した。生活は決して楽ではなかったと思われるが、門弟や同行に支えられて平穏な生活を送っていたと思われる。

教団の形成

聖人の二十年近くに及ぶ布教活動によって関東一円に門徒集団が形成されていった。聖人の門弟の名前を記したものに『親鸞聖人門侶交名帳（もんりょきょうみょうちょう）』というものがあるが、それによると常陸（ひたち・茨城県）二十、下総（しもうさ・千葉県）四、下野（しもつけ・栃木県）六、武蔵（むさし・東京都）一、陸奥（むつ・福島、宮城、岩手県）七、越後（えちご・新潟県）一、遠江（とおとうみ・静岡県）一、京都八の合計四十八人が聖人から直接教えをうけた者として名前が記載されている。その中心が横曽根（よこそね・茨城県常総市）の性信（しょうしん）を最初の指導者とする横曽根門徒、高田（栃木県真岡市）の真仏や顕智（けんち）の高田門徒、鹿島（茨城県鉾田市）の順信の鹿島門徒である。これらの門弟にはそれぞれの門弟がいたので、それらの門徒を合わせると数千人にのぼると見られる。彼らは月に一回はお座を開いて聞法した。その日は多く法然上人の命日の二十五日で、それを「二十五日の御念仏」とよんだ。聖人滅後は、聖人の命日二十八日にかわり、今日まで綿々と続いているのである。その会所（えしょ）となったのは多く、信州善光寺のご本尊をまつる如来堂や、聖徳太子をまつる太子堂であった。やがて太子堂が寺院

として発展したものが高田専修寺（栃木県真岡市）である。また門徒の数が多くなれば自分たちだけの会所もつくられた。それが道場である。今日でも各地のお道場で二十八日にはお講がつとまっている。

日野佐衛門の改心

大正六年に刊行された倉田百三（ひゃくぞう）の戯曲『出家とその弟子』は大ベストセラーとなり、国内のみならず、海外にも多くの読者を得た。この戯曲の第一幕のもとになっているのが、枕石寺（ちんせきじ）に伝わる伝承である。

日野佐衛門頼秋は近江国（おうみのくに）日野の北面（ほくめん）武士であったが、訳あって流罪の身となって常陸の国へ来たのであるが、流罪が解けても故郷へ帰らず、内田の里に居を構え、金貸しを業としていた。生来の人間不信で、頼るものは金品しかないと考える人物であった。それが流罪の遠因となったのかどうかはわからないが、少なくとも流罪後、彼の人間不信は一層つのり、信じられるものは銭しかないとうそぶくようになっていた。

ある年の冬の日のこと、日野佐衛門は借金の取り立てに回ったが、逆にことごとく延済を申し込まれて、返済を拒まれ、夕刻からヤケ酒をあおって

「借りるときの観音顔、返すときの閻魔（えんま）顔とはようういたもんじゃ、どいつもこいつも、わしを邪見か畜生のようにあしらいやがる」

と、女房を相手にくだをまいていた。外はいつの間にか雪になり、冷えこんできた。

「わしは悪人になりきるんだ。善人づらしている奴らの面の皮をひんむいてやる！」

日野佐衛門が毒舌を女房に吐いているところへ、布教途中の親鸞聖人が一夜の宿を乞うた。雪に足をとられたのか、草鞋（わらじ）に血をにじませていた。だが、すさんだ心の佐衛門は、言下に、「泊めるわけにはいかぬ！」と断った。

やむをえず、聖人は軒先で野宿することにした。雪は次第に吹雪となって全身を包む。聖人は軒先の石を枕に、網信傘（あじろがさ）で顔を覆って体を横たえた。そのまま眠りにつくことはできない。

聖人は身体を横たえながら「南無阿弥陀仏・・・」と念仏をくり返しくり返し称えていた。

夜中、佐衛門の夢に観音菩薩が姿を現して、「佐衛門、なんじ知らずや、いま門前に阿弥陀如来が泊まらせたまうぞ。早く教化をこうむるべし　この期を逃せば、なんじは永劫（ようごう）に苦海をのがれられぬぞ」と告げた。酔境もうろうとしていた佐衛門は、このお告げに飛び起きて家を出てみた。だが、酔境の彼の目に映るのは、吹雪の中で念仏を称える聖人の姿だけである。佐衛門はあわてて無礼を詫び、聖人を家へ迎え入れて観音の夢告を語り、さらにはこれまでなしてきた悪業をすべて告白した。聖人はそれを温かく受けとめたのであった。

「私たちは悪いことばかりしています。人を憎み、呪いもします。だが、汚れきった心であっても、信ずる心だけは誰にでもあるもの、その心こそが永遠に輝く仏の光なのです」

佐衛門は聖人の教えに打たれ、髪を切って弟子となった。入西房道円（にゅうさいぼうどうえん）の誕生である。道円はその後、念仏道場を開き、石を枕に念仏する聖人の姿を生涯心に刻むために、枕石寺と名づけた。寺には聖人が枕にし「大心海（たいしんかい）」と彫られた石枕や、石を枕にして眠る聖人の姿を刻んだ「雪中枕石の御影」などが安置されている。

（住職）

枕石寺（茨城県常陸太田市）

雪中枕石の御影

世話方集会が開かれました

新役員が承認されました

筆頭総代　吉川芳弘
（武周町出身・福井市大島町在住）
総代　末定育雄（安田町）
総代　高橋秀隆（武周町）
会計　高橋　諭（武周町）

退任された皆様有り難うございました

筆頭総代　鈴木春夫（武周町）
総代　末定文好（安田町・今年三月ご往生）
総代　内田健治（武周町）
会計　吉川芳弘

主な行事予定

7月10　11日　永代経
11日はバスが3台出ます。
10月17　18　19日　報恩講
18日はバスが3台出ます。
11月28　29　30日　御正忌報恩講
29日はおときを
ご用意いたします

その他

☆大台所の水回り工事にとりかかることになりました。永代経までには完了する予定です。

☆お寺に関心を持っていただけるような努力が必要だとのご意見をいただきました。

筆頭総代就任のご挨拶

吉川　芳弘

今年の大雪もやっと消え、西雲寺のしだれ桜も咲き始めました。

三月の世話方集会で承認され、この要職に就かせて頂きました。

日毎に責任の重大さを痛感いたしております。とてもそのような器ではないし、地元に住んでいない事もあり、何回も断ったのですが、武周の世話方、町内会長、特に住職さんは家まで来られ薦めるので、覚悟を決めました。

お引き受けした以上は、私なりに一生懸命頑張りたいと思いますので、皆様のご指導ご協力よろしくお願い致します。

さて、五月には本山で七百五十回御遠忌が勤まります。皆様の浄財で改修工事が完了し、とてもきれいになりました。

まだ席に余裕があるそうなので、是非お参り致しましょう。

西雲寺でも、三年積み立てしています。ある程度資金が出来たら、御遠忌を勤めたいと思います。今後とも何かとお世話になりますが、よろしくお願い申し上げます。

東日本大震災がもたらした津波・原発の放射能漏れ等、大被害が今も続いております。被害にあわれた方々に心からお見舞い申し上げます。

改めて、人間は地球上ではちっぽけなものです。人は万物によって生かされている、自然の偉大さを思い知らされました。

明日は我が身、後生の一大事です。そのために仏法を聴聞させて頂きましょう。

最後になりましたが、西雲寺の発展と御門徒の皆様方のご健康とご多幸を祈念申し上げまして、ご挨拶に代えさせて頂きます。

退任のご挨拶

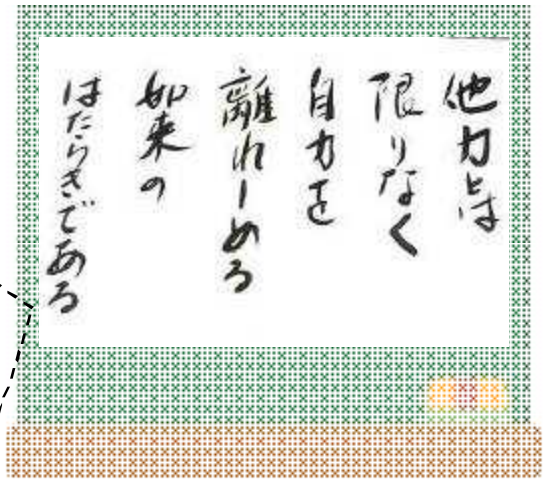
鈴木　春夫

平成十八年三月、世話方集会において各位の温かい支援によりご推挙をいただき、筆頭総代の栄職に就かせていただきました。

この間、短才全く微力でありましたが、永代経、報恩講など寺の諸行事を通してお念仏相続の思いを新たにし、寺門の護持発展を目指し円滑な寺の運営にひたすら精進してまいったつもりでありますが、何分にも力及ばず、お同行の皆様方のご期待に添うような業績をあげ得なかったことを、今さらのごとく反省いたしている次第であります。

今まで私どもに力強いご協力を終始寄せていただき、感謝にたえません。皆様方のご厚意に対し心から御礼を申し上げ、退任のご挨拶といたします。

山門掲示板



親鸞聖人に「智愚（ちぐ）の毒」ということばがあります。「智」とは「智慧」の智であり、智者ということでしょう。

「愚」とは智慧なき者ということです。愚かな者の言動には人を傷つける毒があることは分かりますが、智慧ある者にも毒があるというのです。自分は気づかないけれども、自分の智慧や能力を誇り、自分の善行に執着するこころを離れることができないのです。このこころが人を傷つけ、仏道を求める妨げとなるのです。愚かな者は「自分はどうせ愚かで凡夫だから」という卑下するこころが仏道の妨げとなるのです。「智者」も「愚者」もどちらも本願をたのみ念仏申すことができないのです。これは共に自力の世界です。他力とは「如来の本願力」であり、限りなく自力の執着を離れしめる如来のはたらきです。（住職）

先輩の感動をたずねて

正信偈１２０行の中で一番好きなところです。耳の痛い言葉が続く正信偈の中で、喜愛心という字を見るだけでほっとしますし、先輩であるおじじ、おばばたちの柔らかな顔が思い浮かぶからです。

僕なりに訳してみます。「仏の願いを喜び愛する心が起こる時、煩悩を消すまでもなく涅槃の利益にあずかっているのです」よく似たことが『歎異抄』冒頭にも伝わっています。「仏の願い通りに浄土に往生したいと念仏する心が起こる時、同時に浄土の利益にあずかっているのです（意訳）」

私利私欲の「愛」だけで生きている私の中に、自他ともにという浄土を願う仏の「愛」がいつの間にか生まれ、浄土を愛しながら生きる生活が始まるのです。それが念仏の先輩（例えば法然上人、亡くなったあの方…）の後ろ姿でした。私でない私の心、煩悩のままで浄土の利益にあずかるとはこのことだったのか！

人の養分は、愛と喜びだと思います。（編者）

能発一念喜愛心（のうほついちねんきあいしん）
不断煩悩得涅槃（ふだんぼんのうとくねはん）
親鸞作『正信念仏偈』より

読み方―能（よ）く一念喜愛の心を発すれば、煩悩を断ぜずして涅槃を得るなり。
※喜愛心―（仏の願いを）（愚かな私の背骨として）喜び愛する心。
※一念―ひとおもい。ひとたび。
※発―起こる、開かれる、起こされる
※能―（ありえないことが）できる

東日本大震災と希望

日本列島は今ちょうど桜の季節です。あまりに美しく、あまりにその時は短いので、桜の花はよく、はなかい命の譬えとして、私たちの心をとらえます。

もし、亡くなられた方々をはかない命として受け止めるならば、なんと悲しく、なんと淋しいことでしょう。二度と会えないという絶望の前では、言葉もありません。

私たちはこの悲しみから逃れるために、故人を風や花にたとえて身近に感じたいと願います。しかしながら、いくら想像しても、心に空いた空洞を満たすことはできないでしょう。なぜなら、心地よい風がいつでも吹いているわけではなく、また、花は必ず枯れてしまうからです。

風や花と違って、人は、温かな体温を持っています。心の空洞を満たすには、その体温に再び会うしかないのです。再会の喜びを実際に味わった先人がいるということが、希望への確かな道しるべとなるのです。今、未曾有の悲しみの中で、何の望みもないと感じる時でさえも、先人を訪ねるという確実な道が残されているのです。

先人は教えてくれました。「なんまんだぶつは仏（共に歩く多くの方々）のお心」なんだと。「私の口から出る念仏も、念仏を称えようと思い立つ心も、それは１００％仏からいただいたものだよ」と。だからそれを喜び、それを尊んで、畑にいてもトイレにいても思い出しては念仏するのだと。先だっていかれた方の心が、養分となって私の心に生きているのです。体は無くなっても、私を動かすエネルギーとしてはたらいているのです。いつでも一緒なのです。

例えば、震災のニュースを見て、胸が痛み、役に立ちたいという気持ちがわき上がってきたとします。それは私の良心でありながら、私の中に働いている仏の心、先人のエネルギーなのです。育てられ、与えられていたことに気付かされた時、温かかった人との不思議でダイナミックな再会があるのです。

そこに目覚めてみると、亡くなった方の温かな心もまた、育てられ与えられたものであることに気が付きます。そのお育ての力は、遠い昔から流れ来たる、無数の太い力だったのです。言うなれば、限りなき愛です。先人は、そのはたらきを仏の願い（本願力）と呼び、仏ごころ（お慈悲）と敬ってこられました。肉体としての命は終えても、決して滅びない永遠の命（無量寿）が、我が胸に現存するのです。そして、先人がそうであったように、永遠の力を敬う私もまた、知らず知らずに永遠の力へと還っていくのです。

この希望と喜びをはっきりと教えて下さったのが親鸞聖人でした。改めて、彼が出家に際して詠んだと伝わる歌を味わいたいと思います。

明日ありと思う心のあだ桜
夜半に嵐の吹かぬものかは

（一夜にして桜が散るかも知れないように、明日の命は分からない。今こそ、真の喜びに目覚める時である）

（編者）

県 PTA 連合会の呼びかけに応じて、西雲寺も、被災児童生徒の受け入れ先として登録いたしました。その節にはご支援ご協力をよろしくお願い致します。また、本山を通じて義援金もお送り致しました。

発　行

真宗仏光寺派　専念山　西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声　大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。